ゴート語の語頭p - 音について

„Über den Anlaut „p-“ im Gotischen“
Toin Universität, Jura

鹿児嶋　繁雄

桐蔭横浜大学法学部

（2014年3月20日　受理）

1.「印欧語比較文法」という壮大なフィクションのボタンの掛け違いによって、ゴート語(380年、以下 got.）自体の研究はおろそかになり、語源・名詞の性など文法の一貫性がそこなわれている。

印欧語（indgerm.）とは、インドおよびヨーロッパの諸言語で、その語彙・音韻・文法構造が親近関係にあると想定する大語族で、19世紀の比較言語学の成果として、印欧祖語から古代インド語、イラン語、アルメニア語、トラキア語、イリュリア語、アルバニア語、ヒッタイト語、プルュギア語、トカラ語、古代ギリシア語、イタリック語、ケルト語、ゲルマン語、バルト語、スラブ語が派生したと考えている。

このindgerm.は、旧約聖書の「バベルの塔」の逸話を忠実になぞるだけの考えで、科学として実証不可能である。現実的には、アレキサンダー大王（BC336～323）による東征、それに伴うヘレニズムの影響、文明の高い言語が文明の低い言語を征服するというsuperstratum（上層言語）とsubstratum（基層言語）の関係と考えるべきであろう。

got.はまさに、ギリシア語（以下gr.)、ラテン語（以下lat.）に接した未開人の言語であって、決してgr.,lat.と共通の源をもっている訳ではない。

印欧語比較文法の文脈で、got.はどのように説明しているか、Kluge を見てみよう。ちなみに、Kluge は「標準的な」語源辞書の著者であり、語源の解説も印欧語の流れで行っている。

「ゴート語は、第一次子音推移に関与している、なぜならこの子音法則は、有史の長い間、ゲルマン人すべての祖語に影響を及ぼしたからである。そしてゲルマン人はウルフィラ（ゴート語聖書の翻訳者）の時代に先んずるローマ時代の固有名詞・民族名・固有名詞（frame [ゲルマン特有の短剣] のようなゲルマン語固有の名称）に対して、この法則に関与している。この法則は、ゲルマン人を他のインド・ゲルマン人と分かつ。印欧語の太古の状態（Urzustand）は絶対的純粋性において印欧語族のいかなる文献上の言語時期において再び見つけ出すことはできない。しかし、研究はゲルマン語子音推移によって矛盾なく論理的に変化した原始状態を確定した。

印欧語硬破裂音（無声破裂音 Tenuis）„p,t,k“ はゲルマン語では硬摩擦音 „ch,t,k“ になる。しかし “„ch“ に比較的新しい代替音として、部分的には帯気音の機能をもった „h“ が現れる。」(1)

Kagoshima Shigeo : Department of Law, Faculty of Law, Toin University of Yokohama, 1614 Kurogane-cho, Aoba-ku, Yokohama, Japan 225-8503

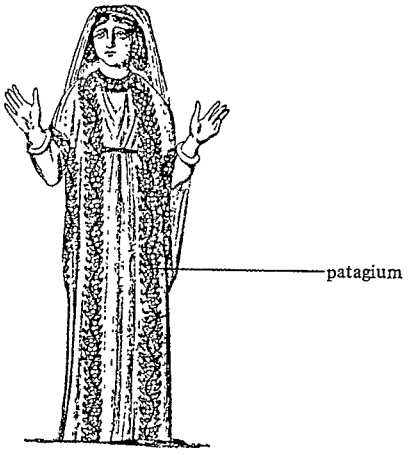
文献上この第一次子音推移（p → f）が現れるのは got. の „fisks“「魚」で、この語と対応する lat. の „piscis“ とを歴史的背景を抜きに音だけを比べれば lat. „-p“ → got. „f-“ への変換は元になることばからの「論理的」な帰結とする誤った道に進むことは理解できる。しかし、文献上で証明不可能なことばを元に音韻体系を組み立てても砂上の楼閣に終わるだけで、語源の説明としては、曖昧で無意味な内容になる。indgerm. というブラックホールにすべて転嫁している語源の記述から、現実的な歴史事実を踏まえて文献上証明可能な材料から探っていく。

2．got. において、語頭音 „p-“ で始まる単語は 22 ある。そのすべてが、got. 本来の単語ではない。lat. または gr. の単語をそのまま使用するか、模倣・変形した形を使用するかのいずれかである。現代語（nhd.）でも „p-“ で始まるドイツ語ほんらいの単語は、„putzen“「（磨いたり、こすったりして）きれいにする」という擬音語由来の単語ひとつだけである。

ドイツ語にとって „p-“ で始まる単語は奇妙で異質な音のようである。ちなみに、各言語における使用音の偏りについて indgerm. 文法は一顧だにしていない。

got. の „p-“ で始まる単語は以下の通り。人名・地名などの固有名詞は省いた。矢印の右側は聖書で対応する gr.lat. の単語。＞以下は、筆者が考える語源。

（1）paida　f．→ lat.tunica f. gr.χιτω'ν m.「下着」
＞この単語 paida は、lat.patagium「服に付けた金の縁飾り」の同定ミスのように思われる。図を参照 (2)。



服の名前を訊ねたにも拘わらず、質問された側は、服に付いている飾りの名前を質問されたと勘違いして、答えたという場面が想像できる臨場感あふれる単語のように思われる。この paida はオーストリアで Pfeid f.「シャツ、下着」として現代にも生き残っている。Kluge の語源辞書では、gr.βαι'τη「革の上着」を語源としている。gr.β- → got.p- への変換は著者の思いつきであろう。「下着」という文明語をいかに取り入れたかが問題で、「下着」という概念のない野蛮人とはいえ、paida を用いている「マルコによる福音書」5,40 では「下着」と「上着」と対比させている。「下着」にあたる単語に本来「上着」を意味する単語を用いるのは不自然である。

Mc.5,40 jah þammawiljandin miþ þus staua jah paida þeina niman, aflet imma wastja.
マルコによる福音書 5,40 あなたを訴えて、下着を取ろうとする者には、上着も与えなさい。

むしろ、gr.βαιτη は、逆に got.paida を受け入れた可能性もある。野蛮人の着ている「毛皮・革をローマ人は殆ど使わなかったし軽蔑さえしていた」(3) ので。

(2) paintekuste → gr.πεντηκοστη',lat.pentecoste「五旬節、精霊降臨祭」
(3) parakletus → gr.παρα'κλητος,lat.paraclitus 「弁護者」
(4) paraskaiwe → lat.parasceve,gr.παρασκευη' 「準備の日」
(5) paska → lat.pascha,gr.πα'σχα「過越祭」
(6) paurpura → lat.purpura gr.πορφυ'ρα「紫の衣」
(7) paurpuroþs → lat. purpureus gr.πορφυρου'「紫の上着」
(8) peikabagms → lat. palma gr.φοι'νιξ「なつめやし」
(9) pistikeins → lat. pisticus gr.πιστ'ικος「純粋な」
(10) plapja → lat.platea gr.πλατεια「大通り」
(11) plat → lat. commissura gr.ε'πι'βλημα「継ぎ当て」＞ gr.πλα'τη「幅広く平たいもの、櫂の水掻き、(比喩的に) 船、航海；パピルスの一枚」。この単語も同定ミス。
(12) plinsjan → gr.ο'ρχη'σσθαι lat.saltare「踊る」＞ gr.πλιξ「歩み」の同定ミス。
πλι'σσομαι「速歩で進む (馬)」のように素早い動きを表す。現代語の flink「すばやい；敏捷な、すばしこい；器用な」の語源で、語源辞書 (4) が挙げている 17 世紀の低地ドイツ語 flink より 1300 年も古い。
(13) (ana) praggan → lat. tribulatio gr.θλι'βω「苦難」＞ lat.praecludo「閉ざす、ふさぐ、妨げる」由来の造語。
(14) praitoriaun → lat. praetorium gr.πραιτω'ριον「総督官邸」
(15) praizbwtairei (s) → lat.presbyterium gr.πρεσβυτε'ριον「長老制度」
(16) praufetis → lat.prophetissa gr.προφητις「女預言者」
(17) praufetes → lat.propheta gr.προφη'της「預言者」
(18) praufetja → lat. prophetia gr.προφητει'α「預言」
(19) praufetejan → lat. prophetare gr.προφητευ'ειν「預言する」
(20) psalmo → lat.psalmus gr.ψαλμ'ος「詩編」
(21) puggs → lat. sacculus gr.βαλα'ντιον「財布」＞ lat.puga「尻、臀部」。聖書時代の「財布」とは、lat. sacculus「小袋」で、硬貨を入れて紐で肩から下げたり、腰帯に結んだりして用いる。got. は財布の形から名付けたのであろう。
(22) pund → lat. libra gr.λι'τρα「リトラ (重さの単位。326 g)」＞ lat. pondo「副詞重さで、目方で」。時に libra を省略して用いる。つまり pondo = libra coronam と同じ意味で用いる。auream libram pondo decernere「(重さ) 1 リーブラの黄金の冠を授与する」(5)

3. got.fisks「魚」は、比較文法のいうように共通祖語からの発展形なのかはかなり疑問。

上記 2. で見たように、got. の単語には本来、語頭音 p - の単語は存在しない。文明語は p- 音をそのまま導入し、外来語として現代語まで続いている。あるいは puggs,plinsjan のように lat. gr. の単語を借用している。あるいは、atta「父」のように lat.pater,gr.πατη'ρ の p - 音を省く。ただし、必要性がある場合、lat.p- を、got. では f- に変換する。しかし、家畜を表す単語は got.

独自の単語を使っている。

家畜

	got.	lat.	gr.
豚	swein	porcus	χοι'ρος
羊	lamb	agnus,ovis	προ'βατον,α"ρην
馬（=財産）	aihts	facultas	πα'ντα τα' υπα'ρχοντα
子牛	kalbo	vacca	καιειν
鶏	hana	gallus	α'λε'κτωρ

食べ物

魚	**fisks**	**piscis**, pisciculus	'ιχθυ'ς,ι'χθυ'διον
パン	hlaifs,azwmus	panis	α'ρτος
肉	leik	carno	σα'ρξ
塩	**salt**	**sal**	α"λας
水	wato	aqua	υ"δωρ

問題は、なぜ文明語ではない、各言語の基礎語彙のなかで「魚」「塩」だけ lat. の単語を模倣しているのか、という点である。AD200 には黒海沿岸に住んでいる西ゴート人が、魚を食べなかったのか？ワイン（got.wein,lat.vinum）のようにローマ人から教えてもらったのであろうか？基礎的食料である魚・塩を外国語で言い表す必要はどこにあるのであろう。

一つの仮説は、「魚」と「塩」には商品価値があったからではなかろうか。

歴史では、「「古代ローマの辺境防壁」（Limes）によって国境が確定した後…Limes の近くでは自然発生的に物々交換が発生した。物々交換には実際いかなる制限もなかった。ほとんどあらゆる物が物々交換の対象となった。」[6] とある。

しかし、具体的にどんな物が物々交換の対象になったのかという記述はない。タキトゥス『ゲルマーニア』においても「しかし、われわれにもっとも近くにすんでいるものたちは、商取引をいとなむ結果、金銀の価値をわきまえ、われわれの貨幣のいくつかの種類を知っているのみならず、選んでこれを受け取るのであるが、内奥に住むものたちは、さらに単純な、さらに古風な物々交換を行っている。」[7] と、取引の内容は曖昧のままである。

ローマ人との商売上、売る物の名前は、相手の使っている単語を使うことは、当然で、魚・塩の取引はゴート人にとって大切な取引であったに違いない。なぜなら、日本人にとって醤油が食事に欠かせないのと同じように、ローマ人にとって魚醤（garum）は食事に不可欠であったようだ。Limes に駐在している兵士にとって故郷の味である魚醤は、魚と塩さえあれば簡単に作れたようだ。

「魚の内臓を容器の中に入れて塩をまぶす。

(1) 小魚を用意する。主としてアテナリエ [翻訳不能] かアンチョビーであるが、どんな種類の小魚でもよい。全部に塩をまぶし、日なたにおいて熟成させる。ただし、定期的に裏返すこと。日なたでの発酵が完了したら、容器のなかに細かく編んだ深籠を置き、その中に魚を入れる。魚に圧力をかけて籠からガルムを絞り出す。

(2) ピチュニアの住民は、アンチョビーを選ぶのだが、もしなければ、ありあわせの魚でいい。

小魚でも大きめの魚でもいいし、アンチョビーでも鯖でも鰹でも、アルレクでも構わない。組み合わせはどうでもいい。これらの魚を大桶に入れる。大桶にはたいてい小麦も入れてある。魚九リットルにつき一リットルの割合で塩を加え、魚と塩をまぜる。これを一晩ねかせておく。翌日それを土壺にうつし蓋をしないで二、三ケ月のあいだ日なたに置く。ときどき棒で掻き回す。

(3)ガルムを作っていますぐ使いたい、日なたに置くのではなく鍋で煮て作りたいというときは、次のようにする。念入りに作られた塩水を用意し、卵を入れて浮かぶかどうか試す。もし沈むようであれば塩分が足りないことになる。塩水と魚を新しい土鍋に入れて、オレガノを少々加え、強火にかけて煮立たせ、しばらく火を通す。そのあとは火からおろして冷まし、濁りがとれるまで何度も濾過する。それから瓶にうつして蓋をする。

・・・ガルム工場はローマ帝国のどこの前哨地にもあった。この醤の素材になったのはエビ、鰯、鯖、アンチョビー、鮪、鮭、ヒメジ、牡蠣その他もろもろの海産物であった。」[8]

以上のように、ガルムは、魚と塩さえあれば兵士でも簡単に作れそうだ。魚も基本的には魚であればなんでもよさそうである。よって必然的に「魚」「塩」は商売相手であるローマ人が使っているラテン語を模倣した単語をゴート人は使っている。got.saljan は明らかに現代英語 sale「販売」と古英語 sala「売る、与える」に繋がる単語で、「与える」という意味は、ゴート語時代の物々交換の意味が残っている。

比較文法が想定しているような共通祖語からこの fisks が派生したのではなく、ラテン語からの借用と考えるほうが合理的である。

4.「天国」はどこに？

上記のように、got. は、文明語は lat.gr. からの借用で、文明語以外は自分たち独自の単語を使っている。だが、文明語である「楽園、天国」lat.paradisus, gr. παραδεισος に対し、got. は waggs という単語を充てている。

Die zweite Brief des Pauls an die Korinther12,4

got. þatei frawulwans warþ in <u>wagg</u> jah hausida unqeþja waurda, þoei ni skuld sind mann rodjan.

nhd. der wardentrückt in <u>das Paradies</u> und hörte unaussprechliche Worte, welche ein Mensch nicht sagen darf.

彼は<u>楽園</u>にまで引き上げられ、人が口にすることを許されない、言い表しえない言葉を耳にしたのです。

この got. waggs「楽園」について、Holthausen[9] は、古代インド語 vang-r, 古英語、古ザクセン語、古高ドイツ語 wang「平地、野原、草原（Ebene,Feld,Wiese)」と関連付けている。Diefenbach[10] も同様に「平地」説をとっていて、さらに現代語の Wange「頬」とも関連付けている。さらにオーストリアでは wang は「柵で囲まれた畑」(ein eingehegtes Feld) の意味があり、スイスで wank とは、「アルプスの傾斜面」を表す。いずれにせよ、waggs「楽園」の宗教的な意味は早い時期に使用されなくなった、と述べている。

この謎を秘めた waggs を違う視点から探る必要がありそうだ。

(1) Wange「頬」の意味は「骨・内部を含まない外側」のことを指す。

(2)「柵で囲まれた畑」

(3)「アルプスの傾斜面」

(4) waggs から派生した got. の動詞 wagjan と対応する動詞 lat.agitare「1．絶えず（激しく）動かす、駆る、狩りたてる、追求する。2．ゆする、ゆすぶる、突き動かす、刺激する、不安にさせる・・」,movere「1．動かす，移す、変える 2．ゆすぶる、ふるわせる・・」。現代語の bewegen「動かす」「・・を・・する」気にならせる」の語源。

以上から waggs の意味が指し示す lat. の名詞は vagina「1.（刀の）鞘 2．莢、外皮、殻 3．膣」なのではないか。1．「鞘」の意味で got. は fodr という got. 本来からある単語を使っている。この単語も現代語の Fotze「膣」に繋がる。

「楽園」という異文化の概念をゴート人に分かりやすく伝えるため翻訳者ウルフィラが考え抜いて出した答えが 3．「膣」なのではなかろうか。上記（1）～（4）の「頬」、「柵で囲まれた畑」、「アルプスの傾斜面」、「その気にさせる」をすべて包含するのが vagina のように思える。

注

（1）Kluge,F.:Gotische Grammatik S.22-23（Berlin,Leipzig1921）
derselbe: Kluge Etymologisches Wörterbuch（Berlin,1975）

（2）Orbis pictus latinus S.330（Zürich,München 1989）

（3）Bursche,A.:・・・Häute und Felle,von denen manchmal in der Literatur die Rede ist,wurden während der mitteleren Kaiserzeit sichtlich nicht gehandelt,denn die Römer verwendeten sie kaum oder verachteten sie sogar.
Die Entwicklung der Handelsbeziehungen zwischen Rom und den Barbaren S.98（In:Rom und die Barbaren Europa zur Zeit der Völkerwanderung,Bonn 2008）

（4）Der große Duden:Herkunftswörterbuch（Mannheim,1963）

（5）『古典ラテン語辞典』國原　吉之助（東京、2005）

（6）Busche,A.:Nachdem sich die Grenze zwischen Rom und den Barbaren stabilisiert hatte, vollzogen sich die Handelskontakte zwischenden beiden Breichen nach zwei Mustern. In den nahe am Limes gelegenen Regionen entwickelte sich der Austausch spontan,und ihm waren praktisch keine Beschränkungen auferlegt.Fast alles wurde zum Gegenstand des Handels.　ibidem

（7）タキトゥス『ゲルマーニア』P.43（東京、1979）

（8）Faas,P.:Around the Roman table（1994）「古代ローマの食卓』P.187-188（東京、2007）

（9）Holthausen,F;Gotisches Etymologisches Wörterbuch:S.117（Heidelberg,1934）

(10) Diefenbach,L.:Vergleichendes Wörterbuch der gothischen Sprache S.127（Original 1851,Neudruck,Schaan,1983）